

令和元年6月23日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K00794

研究課題名(和文)戦後日本の生活空間の消費財化

研究課題名(英文)Consumerization of living space in the Post-war Japanese housing

研究代表者

黒石 いずみ (KUROISHI, Izumi)

青山学院大学・総合文化政策学部・教授

研究者番号：70341881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は戦後の日本の住宅概念の解体が、アメリカ消費文化や冷戦期の文化政治の影響による社会基盤としての役割の喪失・消費財化に起因すると考え、日米の40年代から60年代にかけての住宅政策、庶民住宅デザインと生活様式を比較し、その関係を原資料の分析や現地調査で考察した。米国の住宅政策とデザイン調査では、戦時中からの複雑な社会要因のために住宅デザインのアメリカ的イメージが一貫して重要視され、技術との関係は時代毎に変化したのに対して、日本のそれはアメリカの冷戦期文化政治の影響を強く受け、住文化の独自性の問題は曖昧に調停されて、消費文化が生活改善の手段として肯定され工業化住宅のデザインもそれに同調した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後の日本の住宅概念と生活様式の変化を、戦前から戦後にかけてのアメリカのそれと比較し、単なる西洋化・近代化ではなく冷戦期の文化政治の一部としてのアメリカ化であり、生活空間の消費財化であったことを原資料にあたって研究した。このようなアプローチは建築学・社会学ではこれまでなされておらず、空間の使い方を扱う生活デザインの視点と近年の戦後史研究の進展の成果でもある。研究の社会的意義は、住空間のイメージや技術の価値、社会基盤としての役割が、機能性や近代化のイメージだけでなく政治社会的要因で歴史的に形成されてきたことを明らかにし、自分自身の生活空間の基盤と価値判断を再考する手がかりとすることである。

研究成果の概要(英文)：This study examined the relationship between the housing policy, design of the common people's houses and their lifestyle images between the 40's and 60's in both Japan and the United States, by analyzing the source data and by conducting field surveys. In the United States, while there were many social issues, the American image in housing design was consistently important, and the relationship between housing design and technology changed frequently. On the other hand, Japan's post-war housing system and design were influenced by American Cold war cultural politics, the uniqueness of the Japanese traditional lifestyle and culture were ambiguously reconciled, and the positive affirmation of the American image as the method of lifestyle improvement was promoted in various media. The planning philosophy of Japanese public housing and the design of industrialized housing were in line with these changes, and accelerated the dismantling of the Japanese spatial concept of housing.

研究分野：都市建築理論、生活デザイン

キーワード：住宅政策 消費財化 冷戦期文化政治 米国住宅政策 アメリカ的イメージ 工業化住宅 公共住宅  
メディア

## 1. 研究開始当初の背景

近年深刻化する長寿社会化に対して、生活の場での地域的共助の仕組みの再構築が求められる一方で、人々のよりどころでもある家族と地域社会を結ぶ地縁そのものが解体している問題が指摘されている。何よりも、郊外住宅地で一斉に進む高齢化による空き家の増加、地域の若者人口の流出による少子高齢化と親類家族や地域のつながりの消失、都市部でも進む家族の解体といった事象は、従来の社会的な家制度と一体になった空間的家概念がもはや成立しない状況であることを示している。そしてこのような状況は、近年の日米の戦後交流史研究の進展とともに、戦後の産業や行政制度、生活が近代化した当然の帰結というよりも、むしろ戦後の日本の生活空間・生活文化におけるアメリカの冷戦期文化政策と消費文化の長期的な影響による、社会基盤としての住宅という概念の衰退が大きな要因であることが社会学などの領域で明らかになりつつある。

本研究はそのような戦後史研究の成果を生かして、住宅をめぐる生活空間への戦後のアメリカの消費文化の影響に注目し、戦後の住宅デザイン思想の変化と、住宅生産システム・プレハブ技術の精密化、住宅金融や開発政策による住まいのイメージと生活様式の変化を、総合的に、また比較文化的に検証しようと考えた。著者は2011-2015年には日本の庶民住宅の近代化に関する科研費による研究を行い、また2015年にはカナディアン・センター・オブ・アーキテクチャーでの調査で欧州と米国の間には存在した戦後の住宅技術とデザインの交流の事象を調査した。これらの継続的な問題意識と蓄積を基に本研究を構想した。

## 2. 研究の目的

本研究では対象とする問題を設定する事と、具体的な調査分析事例を収集する方法、またそれを理論化する解釈の枠組みを形成する事の三つのレベルを常に念頭に置いて、調査から考察、研究交流を循環的に行った。したがって研究の目的はこの三つのレベルで説明すべきなのだが、明確さを期すために、ここでは研究で最終的に明らかにしようとした問題を、目的として説明する。

戦後の住宅デザイン思想の変化と、住宅生産システム・プレハブ技術の精密化、住宅金融や開発政策については、国内ではすでに多くの建築構法や建築史研究が行われている。それに対して本研究では、物理的な住宅や建築を中心とした議論ではなく、それらの技術や造形とそこで営まれる生活の価値観やイメージ、生活様式、また社会的な制度との関連を議論することを目的とした。さらにそれが戦後の多様な力学の磁場の中で複合的に政治・経済・社会システムの一環として形成される過程を提示することを目的とした。具体的には、戦後のアメリカ軍による占領政策や消費経済社会の仕組みの浸透が、特に工業化住宅を媒体として日本の戦後の住宅生産や政策、生活様式にどう影響を与えたのか、それがどのような意味を持ち、具体的にどのようなデザインを生んだかを総合的に記述分析したいと考えた。

## 3. 研究の方法

研究の方法は、基本的にアーカイブや図書館における原典資料調査と、工業化住宅やその住宅開発地の事例調査、住民への聞き取りなどを行って、日米の関係を比較対照する歴史調査の手法をとった。また制度史や言説における住宅イメージの変化については、一般誌を含む住宅関連のジャーナルやインテリアデザイン史、家政学における婦人史などの文献を総合的に検証し、代表的な事例を見学するデザイン史研究と、占領期の思想問題や経済問題を扱う社会学や経済学の文献研究の方法をとった。

原資料調査として、日本国内では戦後の占領期から復興期にかけての住宅問題、建設業の復興、住宅の近代化に関する占領軍の関与の調査を国会図書館と建築学会図書館で、住宅計画学の基盤となる住宅営団や公団の提示する計画原理の戦時期から戦後にかけての変化の調査を西山卯三文庫で行なった。また戦後の小規模住宅デザインの事例調査を代表的な事例に絞って各地で実施し、3社の代表的なプレハブメーカーへの聞き取りによる資料調査を行った。

米国ではその住宅文化、社会的な供給システム、住宅建築技術が40年代から戦後にかけてどう展開したかを既往研究で調査し、住宅供給公社で資料調査を行なった。また戦後の占領期・復興期に占領軍は日本の住宅復興や近代化にどう影響を与えたかを、公文書館と議会図書館で調査し、住宅やインテリアデザイン関係の啓蒙活動の状況についてMOMAとGettyなどの資料調査を行なった。また戦時期から戦後にかけての社会住宅の供給事例とその後の変化について代表的な事例を5箇所訪問調査した。

それぞれの調査で収集した資料を対象し比較検討する作業の過程で、情報があまりに多岐に渡るために、一挙に総括することが困難となった。そのため、研究の問題意識に対応するわかりやすい事例から順番に取り上げて個別の論考をまとめ、徐々に整理し関連づける方法を行なっている。

## 4. 研究成果

本研究の独自の成果は、次のようにまとめることができる。

(1)米国の戦時期から戦後の住宅政策の変化、工業化住宅の普及の歴史とその位置付けについて：住宅供給公社の調査で、本研究と関連する事項についての資料を解読して明らかになった

のは、米国の戦時期から戦後にかけての庶民を対象とする小規模住宅計画においては、軍事産業のための労働者住宅供給の仕組みの発達と、人種差別とスラム対策のための多様な住民の混在する社会住宅の計画、その経済的システムの開発の間に連関性があること。またニューディール思想の社会主義的住宅地開発から戦後の大規模な商業的郊外住宅地開発にまで至る郊外住宅地の住空間と地域空間デザインでは、アメリカ的生活イメージの追求が一貫して重要な意味を持ち、その内容が時代ごとに変化した様子を確認できたことである。それは実際の住宅地の調査で現地のヒアリングや資料収集を行った際にも確認できた。

また、議会図書館調査では工業化住宅の理念の創造に寄与したヨーロッパからの建築家たちと、アメリカのインダストリアルデザイナーのチャールズ・イームズらの交流の状況、また西海岸で発達し日本にも影響を与えた実験住宅のデザイン運動に関する資料を発見し、その建築史的な位置付けを研究した。そして MOMA における 40 年代から 50 年代にかけての展覧会の調査や Getty における住宅雑誌の調査では、アメリカが 40 年代初頭からすでに戦後を見据えた国内向けの文化政治の一環として、アメリカ的デザインの建築や住宅の展覧会を企画実践していたこと、住宅雑誌が戦時期から戦後にかけての国民の住宅意識の啓蒙に大きく寄与したことを確認した。これらの調査を通して、工業化住宅のアメリカにおける 50 年代以降の発達は、日本のそれに比べて限定的であることが確認された。その原因を証拠立てる資料は見つけられなかったが、上述のように工業化住宅が社会住宅で普及せず、また郊外住宅でもアメリカ的住宅として認識されなかったことが大きな要因と思われる。

(2) 占領期から冷戦期にかけての日米の住宅デザインや技術、制度的な仕組みの交流について：公文書館で、占領期の日本の住宅問題に関する調査、占領軍のキャンプの建築や地域計画に関する調査、そして占領軍の日本の復興への関与の状況に関する調査を行った。それぞれが膨大な量に及ぶためにまだ解読途中であり、明確な方向性や特異な発見を報告できるまでには至っていない。しかし敗戦直後と冷戦期の占領軍の政策がどのように大きく転換したか、そこにおいてアメリカの消費文化を日本に戦略的に、表立たない形で浸透させると同時に、日本の米国の価値観への同化をどう進めるかが検討された状況を把握した。上記のアメリカ国内の文化政治と日本での占領地文化政治の鏡面関係が確認できた。占領軍のキャンプでの建築文化やインテリアが日本の戦後のそれに影響を与えたという既往研究があるが、それを立証することはできなかった。また、日本の戦後のインテリアデザインの言説と米国における日本評価の言説の関係性も確認し、冷戦期の文化政策の影響を理解することができた。

(3) 日本国内における戦後の工業化住宅の発達と、住宅空間における消費文化の影響について：戦後の家庭雑誌や住宅雑誌の調査でアメリカのデザインがいかに憧れを持って導入され、日本の建築家たちがそれを吸収して戦後の日本的建築デザインを生み出そうとしたかを確認した。その中で工業化住宅のデザインは新しい建築のイメージや理念を生むものとして歓迎され、どのような論理でどのような形態が生み出されたかを確認したが、実際のプレハブ住宅のデザインと技術の発達にそれがどこまで接続しているかは、企業への訪問調査で確認できなかった。他方で、西山文庫や公文書館の調査で戦時中から戦後にかけての集合住宅計画の理念と方法の変化をたどる中で、DK や食寝分離の理論が普及して規範化したこと、生活消費財の量と生活空間の関係、戸建て政策と金融制度の変革が都市への人口集中や郊外開発と並行していることを確認した。これらの成果を総合化して自分なりの問題構成を形成するために、これからも上記の資料を継続的に検討していきたいと考えているが、すでにアジアの国々の研究者、ヨーロッパの公共住宅制度や冷戦期のデザインの研究者との交流が始まっている。

## 5 . 主な発表論文等

[ 雑誌論文 ] ( 計 5 件 )

1. Izumi Kuroishi, "Sense of dwelling in disaster relocation: temporary and public recovery housings after the 2011 earthquake in Japan", IPHS2018, Yokohama, pp57-66 ( 査読あり )
2. 黒石いずみ, 「民俗学から計画へー今和次郎と西山卯三が住まいの生活調査で目指したもの」建築雑誌、vol133, Aug, 2018, pp6-7 ( 査読なし )
3. Izumi Kuroishi, "Rethinking the Social Role of Architecture in the ideas and work of the Japanese Architectural Group NAU," *Review of Japanese Culture and Society, Special Issue Design and Society in Japan*, Josai University, 2017, pp99-117 ( 査読あり )
4. Izumi Kuroishi, "Introduction and translation of Kon Wajiro's theories of design," edited by Paul Stirton, *West 86th: A Journal of Decorative Arts, Design History, and Material Culture*, New York, Bard Graduate Center, Vol 22, No.2, Fall-Winter, 2016, pp190-216 ( 査読あり )
5. Izumi Kuroishi, "Urban Survey and Planning in the 20th century Japan: Wajiro Kon's "Modernology" and its descendants," *Journal of Urban History*, Special Issue, edited by Carola Hein, SAGE, 2016, Vol.42(3) pp557-581 ( 査読あり )

[ 学会発表 ] ( 計 7 件 )

1. Izumi Kuroishi, “Transformation of the Idea of Housing Through the Disaster Displacement: History and Design of Prefabricated Shelter Housing in Japan“, DHS Annual Meeting 2018, Design and Displacement, NY, 2018.9.8 (査読あり)
2. Izumi Kuroishi, “Transmitted Inquiries toward Integrated Humanistic Planning based on Surveys of Everyday Life: from Kon Wajiro to Nishiyama Uzo and Takayama Eika”, IPHS2018, Yokohama, (査読あり)
3. Izumi Kuroishi, “Sense of dwelling in disaster relocation: temporary and public recovery housings after the 2011 earthquake in Japan”, IPHS2018, Yokohama (査読あり)
4. Izumi Kuroishi, “Impact of American culture on the post war Japanese detached house designs,” Modern Living in Asia 1945-90, Brighton University, April.9-13, 2017 (査読あり)
5. Izumi Kuroishi, “Americanization of Japanese Lifestyle in the post war house designs”, CAMEA, Adelaide University, June30-Jul3, 2017 (査読あり)
6. Izumi Kuroishi, “Japanese Social housing in its modernization: Kon Wajiro’s lifestyle study to examine the lived space”, Situating Domesticity in Architecture, National Singapore University, Dec. 6-9, 2017 (査読あり)
7. Izumi Kuroishi, “De-fact standard of tatami-mat in the industrialization of Japanese public housing,” ICDHS, Taiwan, October, 2016 (査読あり)

〔図書〕(計 6 件)

1. 黒石いずみ・小林敬一・中島伸・宮下貴裕共著、『時間の中のまちづくり：歴史的環境の意味を考える』鹿島出版会、2019、59-92
2. Izumi Kuroishi, “History of Japanese Interior and Architecture until the 19<sup>th</sup> century,” *Encyclopedia of Asian Design*, edited by Haruhiko Fujita, Bloomsbury Publishers (刊行中)
3. Izumi Kuroishi, “Dialogues in the post war American and Japanese house designs”, *Modern Living in Asia 1945-1990*, edited by Yunah Lee and Megha Rajguru, Bloomsbury, (刊行中)
4. 篠原聡子、大月敏夫、黒石いずみ他共著、『住宅事典』彰国社、(刊行中)
5. 黒石いずみ・篠原聡子・宮原まみこ共著, 「生き延びるための家」リキシル研究報告書, 2017, 26 ページ
6. Izumi Kuroishi, “Object talks : Confabulation of dwelling space in the texts of Kamo no Chōmei and Wajirō Kon,” *Confabulations:Storytelling in Architecture*, edited by Paul Emmons, Marcia Feuerstein, Carolina Dayer, Routledge, 2016, pp64-70

## 6 . 研究組織

### (1)研究協力者

研究協力者氏名：マルシア・ファーンスタイン教授

ローマ字氏名：Marcia Feuerstein

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。